

ゴッホと静物画 ～伝統から革新へ～

SOMPO 美術館(西新宿) 23. 10. 17～24. 01. 21

17～20世紀初頭までの欧州の静物画の流れの中に「フィンセント・ゴッホ」を位置づけ、画伯が先人達から何を学び、それをいかに自らの作品に反映させ、さらに次世代の画家たちにどのような影響を与えたかを探る企画である。

展示作品は、当館所蔵の《ひまわり》を中心に「約20点」のゴッホの作品と「約50点」の他作家による作品の「静物画」で構成されている。

《ひまわり》コーナーでは、画伯や同世代の画家たちによる「花」や「ひまわり」を描いた作品を紹介して、彼らがこの主題を描いたかを探っている。

「ひまわり」は、西洋の図像伝統のなかで、明確な象徴的意味を担っていた花で、太陽を神やキリストにたとえ、「信仰心」や「愛」の象徴としてきた。

フィンセント・ゴッホ 《ひまわり》 1889年 油彩/カンヴァス



フィンセント・ゴッホ

画伯は、アルルへきた1888年8月に連作のように、壺にさした太陽の花そしてゴッホ自身の花とされる黄色の「ひまわり」を、単純明快なフォルムと色面によって、力強く自由に駆使して描かれているのが特徴である。

病院を退院した89年1月には、過ぎた夏の灼熱の太陽の下に制作に陶酔した健康な夏の思い出のように、ほとんど同じモチーフを繰り返して制作をしている。

《アイリス》 1889年 油彩/カンヴァス



アルルをあとにして、サン・レミの療養院に着いた画伯は、壺にいけられた「アイリス」の花をかなりクローズアップで描いている。

南仏で有名な「アイリス」は、日本でいえば「アヤメ花菖蒲」であるが、「アイリス」と呼ぶだけで、途端に洋風イメージとなるから不思議である。

作品は、花はもちろん葉もとても伸びやかで、花瓶の中に「アイリス」がたっぷりといけられていて、とても豪華で黄色の背景も鮮やかである。

“花を愛するゴッホのすがたが目に浮かぶ”